ガイアなんちゃらを使って平和に暮します！（断言）

ゴブゴブリン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日普段の趣味でオリジナルガイアメモリを
作っていたオリ主が突然現実化したガイアメモリのせいか【アカメが斬る！】の世界に転生してしまうという物語です。オリ主はアカメが斬る！の内容はアニメ版しか知らず、しかもタツミが初めてアリアを殺したシーンまでしか知りません。

目　次

第一章
改造ってなんかロマンがあるよね。 1
目が覚めると危険種ｉｎ森の中（絶望） 4
田舎の村ってなんかホッコリするよね。 8
衝撃の事実知った時って頭の中真っ白になるよね。 12
主人公って絶対イケメンか美少年だよね 18
面倒ごとには関わりたくない人生だった 24
戦闘シーンを書くほど難しいものは無い 29

第一章
改造ってなんかロマンがあるよね。

「・・・ここをこうして・・・っと・・・・」
俺の名前は園崎創憶（そのざき　そうおく）
大学２年のただの一般人だ。
今俺はある玩具を「改造」している。
手のひら位のＵＳＢメモリのような
見た目のオモチャ・・・

そう・・・
【ガイアメモリ】だ。

幼い頃に観た『仮面ライダーＷ』にど
ハマりし、他の子達とは違い、ガイア
メモリやドーパントの格好良さに
テンションが上がっていたものだ。

・・・まぁ大学２年になっても未だにこんな
オモチャをイジってたせいで友達や
彼女なんて　一人も居ないんですけどね!!!

・・・・・・泣いてないし（目潤）

「・・・・・・・ふぅ・・出来たっと。」

黒歴史を思い出して涙ぐんで居るうちに、
完成していた。例えどんなに心が傷ついた
としても、そんなことで俺の趣味は

中断されないらしい。（自業自得）

「・・・よし。今回も上手くできたかな？」

白色の見た目に青色の縞模様。そして
真ん中に書かれている文字は《Ｒ》
そして右上には
小さな文字でこう書かれていた・・・・・・・

《Ｒｅｉｎｃａｒｎａｔｉｏｎ（転生）》と・・・

「いやーしかし、作ったのは良いけど流石にスペースが無くなってきたな・・・そろそろ新しいタンスでも買うかなぁ。」
そう。彼此二年近く作っては飾り、作っては飾りを繰り返してきたので、流石にスペースが足りなくなってきていたのだ。
「さて、どうしよっかなぁ・・・」
うーん、、と考えた結果・・・・・
「まぁいっか！（思考放棄）それより
昨日観ていたアカメが斬る！の続き
観よーっと！」
本当そういうとこだぞ主人公！
「・・・・・・うわっタツミすげぇ。この年で良く
人斬れるよなぁ。俺には
ぜってぇできんわ。」
作ったＲｅｉｎｃａｒｎａｔｉｏｎ（次からＲＥと呼称）
ガイアメモリのボタンを無意識で
押しながら呟いた。
「それにしてもこんな世界に生まれ無くて
ほんとよかったよ。俺みたいな一般人が
土竜とか倒せる訳ないし。そもそも擦った

だけで即死の敵がわんさか居るんでしょ？
無理ゲーすぎるわ。」
そう適当ないことを呟きながらメモリの
ボタンをポチポチしていると・・・

『Ｒｅｉｎｃａｒｎａｔｉｏｎ』

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・っえ？」

右手に持っていたメモリから音が鳴ったのだ
しかし、創憶が驚くのも無理はない。
何故なら音声など入れていないのだから。

そして更に、そのメモリが
光り輝き始めたら
誰でもこんな反応になるだろう。

「えっちょっ・・・何・・・・・・こ・・・・・れ・・・・・・・・？」

俺はそのまま意識を手放した。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ・・・？

目が覚めると危険種ｉｎ森の中（絶望）

「んっ・・・・・・・・・・」
　目が覚めたら…・・・…森の中にいた。
「いやいやいやどうゆうことやねん。」
　頭を振り意識をハッキリさせてから
落ち着いてもう一度辺りを見回す。
辺り一面木々で覆われており、日の光
に関しては殆ど届かない位の葉に覆われて
いた。自分の記憶を辿ってみても、こんな
場所は覚えがない。
・・・ＯＫ。なるほどね。うんうん、
そうゆう感じね。
・・・・・・・・・・・
・・・スゥ――――

「ここ何処だよおおおおおおおおおおおおおお
　おおおおおおおお!!!!???」

やっべぇよやっべぇよ。メモリは鳴り出す
上に光り出すわ記憶にない森の中で
目覚めるわどうなってんの!?・・・・・・
ま・・・まさかこれがあの噂の異世界転生って
やつですか?いや違うじゃん?そうゆうの
ってなんかでっかい宮殿みたいな所で
「ようこそ勇者よ!!」
っていうノリじゃん?なんで俺はこんな
よく分からん森の中なわけ?
責任者!責任者を呼んでこい！（現実逃避）
そんなアホなことをグルグル
考えていると・・・・・

チョンチョン
「ん?今ちょっと忙しいから後でね。」
チョンチョン
「さて、どうしよっかなぁ・・・」
チョンチョン
「イラッ・・・はいはいなんで・・す・・・」

キシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!

「かぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあ!?」

そこにいたのは約15m位にも及ぶ土色をした巨大なドラゴンのような見た目をした生き物だった。しかも明らかにこちらに殺意を向けていた。
やべぇやべぇなんだあれ!?あんな生き物この世界に存在してんの!?こちとら何も持ってないただの一般人だぞ!勝てる訳ないだろいい加減にしろ!(憤怒)
「はぁっ・・はぁっ・・はぁっ・・・」
キシャアアアアアアアアア!!
「このっ・・・いいいかげんにsうおっ!?」
ズルッ
ズシャ!
「いってて・・・・・・・・・・あ。」
グルルルルルルルルルルル・・・
「ヒッ・・・やめろ・・・くるなぁ!!」
キシャアアアアアアアアアア!!!
あ、死んだな俺。
そう思って俺は静かに目を閉じた。

ああ、もっと生きていたかったなぁ・・・
もっと色々なもの作りたかったなぁ・・・

次の瞬間・・・

ギイヤァァアアアァァアアアァァアアァァア
アアアアアアアアアアア!!??

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・つえ？」

恐る恐る目を開けると、自分のすぐ脇の
地面から、まるで槍のように尖った
大きな石の塊が巨大生物の脳天を
打ち抜いて居たのだ。そして・・・

ギ・・・・・ギイ・・・・・・・・・・アァ・・・・・・・・・

ドサッ

二度と起き上がることはなかった。
「・・・・・・何がどうなってんだ・・・うん？」
ふと気が付くと、さっきまで何も持って
いなかった左手に何かがあるのを感じた。
見てみると・・・・・・
「これって・・・・・・」
それは、ガイアメモリだった。しかも

仮面ライダーｗで敵の幹部クラスが使う
【ゴールドメモリ】であり、
イニシャルは《Ｃ》。そして右上には
《Ｃｒｅａｔｅ》（創造）
と書かれていた・・・・・・
「なぁにこれぇ？」（困惑）
えっなにこのガイアメモリ。こんなの
作った覚え無いんだけど。しかもこれ
こんなチートみたいな能力なの？まぁ
Ｃｒｅａｔｉｏｎの名前を見ても、これだけ
じゃあないとは思うんだけどなぁ・・・
「まっイロイロと試して見ますか！」
そうして俺はこのガイアメモリの能力
を調べてみることにしたのだった。

「ってかなんで現実でガイアメモリが
使えてんの？どして？」
今更かい!!!
Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ・・・・

田舎の村ってなんかホッコリするよね。

「よっと・・・よいしょっと・・・・・・」
やあやあ皆どうも主人公の創憶だよ！
今現在、俺はこの森から出るべく、
メモリ片手に冒険中。あれから
モンスターは見ないけど、いかんせん
同じような景色ばっかだから、本当に
外に出れるのかが不安になってくるよ。
え？こっちに話しかけてくるなって？
いーじゃんさみしいんだもん。
「おっ・・・やっと抜けれたよ・・・」
軽いメタ発言をしているうちに、森を
抜け、平野らしき場所に出ることが
できた。しかもよく見ると・・・
「ラッキー！あれって村かな？ちょっと
いってみるか。」
この世界に来て初めての人工物だからなぁ。
色々と情報なんかもらえるかも知れないし。
ついでに宿も借りれたら嬉しいなぁ。
あんな変なモンスターがいる世界で野宿とか
勘弁してほしいし・・・

「へぇ・・・この世界の村って
こんな感じなんだ・・・」
着いた村は、やっぱり現代の痕跡なんて
無く、昔の農村って感じの所だった。
特に意味も無く、その辺をウロウロして
いると・・・

「おい！そこの君。」
「ん？」
「この辺では見ない格好だが、
この村に何のようだ？」
あー、そっか。いま着ている服って
元の世界で着ていた服そのままだから
変に思われて当然か。さて、どう
切り抜けようかな？
「実は、自分少し遠い村からやって来て、
この服は村から旅立つ時に家族から貰った
ものでして、今、旅をしている途中
なんですよ。」
「・・・ふむ。その割には装備が見当たらない
のだが？」
「ここに来る途中でモンスターに
襲われまして・・・」
「なるほどな。まぁこの村には何も無いが、
ゆっくりして行ってくれ。宿は無いが
確か空き家があったはずだから
暫くこの村におればいい。
他の者には俺が言っておく。」
「ありがとうございます。」
よっし！何とか怪しまれずにすんだぞ！
その上空き家も貸してくれるなんて、
まさに九死に一生を得るって感じだな！
「では、これから暫くの間
宜しくお願いします。」
「おう！」

あれから約半年、俺はこの村に随分と
馴染むことができた。
「おばちゃーん。この荷物って
何処におけばいいのー？」
「あぁ。それはそこに置いとくれ。
それにしてもいつもありがとうねぇ。」
「いいって。ここに住まわしてもらえてる
訳だし。これくらいはしなくちゃ。」
そうだ。ここに住んでいる間、あの
ガイアメモリについてもだいぶ解って
きたんだよね。解っていることでいえば、
・ボタンを押して創造したいものを
念じると、それを創造することができる。
・生物を創造することは出来ない。
・構造が複雑であるほど、創造するのに
時間がかかる。
・創造するものの材料を持っていれば、
一瞬で創造することができる。

こんな感じかな？最初は体に差し込んで
みようかなって考えたけど、生体コネクト
もないのに、そんなリスキーなことは
したくない。イタイノキライ。
そこで俺は、あるものを創造するために、
殆どの時間を費やした。毎日毎日、それの
イメトレをし、何回も何回もチャレンジした。
そして、きのうの深夜２時頃・・・
「やった・・・対にできたぞぉぉぉ!!」
それの名は・・・・・・

【ガイアドライバー】だ。

To be continue……

衝撃の事実知った時って頭の中真っ白になるよね。

「・・・よしっ。この位離れば大丈夫かな？」
やあやあ皆、創憶だよ！今俺はあの
森の奥に来ているよ。なんでかって？
それはやっと完成したガイアドライバーの
をするためさ。今後どんな敵に出会うか
分かんないもんね。それに、あんなこと
知った後じゃね・・・

～回想～

「あ、そうだチエお婆ちゃん。」

「ん？どうしたんだい？ソウ坊や。」
この人はチエお婆ちゃん。この村に
住まわしてもらえることになってから、
色々とお世話になった人だ。俺のことは
いつからか「ソウ坊」と呼ぶように
なったが、未だに慣れない。
「この辺に、都市みたいな所ってある？」
「そうだねぇ・・・やっぱり帝都じゃ
ないかねぇ。やっぱあそこがここら辺で
一番栄えて居る所じゃないかねぇ。」
「へぇ・・・帝都ねぇ・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・え？
帝都？帝都ってあの「アカメが斬る！」に
出てくるあの都市？マジで？いやいやいや
まだそうとは決まっていないじゃないか。
落ち着け俺・・もしかしたら偶然同じ名前の

都市かも知れないじゃないか。（フラグ）
「ね、ねぇチエお婆ちゃん?」
「どうしたんだい?」
「土竜って知ってる?」（震え声）
「土竜?あの一級危険種の?ダメだよ
化け物さ。関わっちゃいかんよ。」
ソウ坊。あれは一流の軍隊でも苦戦する
「う、うん・・・解った・・・」（絶望）
うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!
サイアクだぁぁぁぁぁぁ!!!!!!!

〜回想終了〜

・・・とまぁこんなことがあった訳ですよ。
流石に丸腰のままじゃあ不安だから、
こうしてテストしてるってわけ。
「さて・・・やるかな…」
《Create!》
俺はメモリを起動させ、ドライバーに挿し
込んだ。すると、瞬く間に俺の体は
「クリエイトドーパント」に姿を変えた。
「おぉ…こいつぁすげぇや…」
見た目は、黄金色をベースに銀色のローブ
を纏ったような姿で、右手には、先端に
宝石のような装飾が施された
杖を持っていた。
「さて、変身も無事に成功したことだし、
早速検証といきますかぁ!」

〜三時間後〜
あれから解ったことは3つ。1つ目は、

能力値がメモリ単体の時よりも高くなっているということ。２つ目は、耐久力や攻撃力も生身の時よりも飛躍的に高くなっているということ。そして３つ目が…

「流石に作りすぎたかなぁ…」

ゴチャゴチャ…（ガイアメモリー，Ｓ）

既存のガイアメモリなら一瞬の内に作り出せることかな。

やばくない？だって、《Ｗｅａｔｈｅｒ》や《Ｔｅｌｌｅｒ》が使いたい放題ってことでしょ？十分チートじゃね？ふはははは!!

勝った！第三部完!!!

……と思ってた時期がありました。

あの後、試しに《Ｔｅｌｌｅｒ》メモリのようなゴールドメモリを使ってみたんだけど、三十分ぐらい使った辺りでいきなりメモリブレイクしたんだよ？

マジびっくりしたわ。

…で、結果的には、《Ｍａｓｑｕｅｒａｄｅ》みたいな量産型は作り出せる個数の制限や、制限時間のようなものは特になかったけど、能力値が高くなるにつれて、個数の制限や、使用時間が短くなっていくことが解った。

さらにデメリットとして、架空のメモリを作る場合、一日に一つ作るのがげんかいで

あり、しかもしかも、その後約一日、
《Ｃｒｅａｔｅ》メモリを使うことができなくなるというお負け付き。さらに、この場合、感情にも左右されるらしく、最後に作り出されたメモリというのが……

《Ｐｏｃｋｅｔ》（ポケット）メモリだった。

いや確かにさ？この沢山のメモリ邪魔だなとか、どうやって持って帰ろうかなぁとか考えてたけどさ？なんでよりによって最後のメモリがこんなショボそうなメモリなわけ!?

「……まぁいっか。別に他に何か作りたかった訳じゃないし。コレがどんな能力を持っているかも気になるしね。」

《Ｐｏｃｋｅｔ!》
俺はメモリを起動させ、他のメモリを全て亜空間（なのかな？）に収納した。
……意外に便利ね。コレ。

「んじゃっ暗くなる前に帰りますか。あんまり遅いと心配かけるしね。」
そうして俺は、今日の晩ご飯に期待を込めながら、ウキウキした足取りで村に帰った。

村で何が起きているか知らずに……

「……は？」

村に戻ると、何時もの笑い声が無く、
ただただ静寂が辺りを支配していた。
そして、そこら中に血だらけで転がって
いる死体は、何時も俺を支えてくれた
村人たちだった。
「は…はは……なんだよ…これ…」
俺は、おぼつかない足取りで、他の生き
残りを探した。まだ生きている人がいる
ハズ。そんな願いを込めて。

だが、

生き残りは、だれもいなかった。

その後俺は、死んでいった村人たちを
一人残らず埋葬した。一人一人丁寧に、
安心して天国に行けるように願いを込めて。
「……おかしい。」

最初はあの土竜のようなモンスターの仕業
かとおもったが、村人たちの死体には、
どれも鋭利な刃物で切られたような傷跡が
残っていた。つまりこれはモンスターの
仕業じゃ無く……

「……人間の仕業……」

しかも、切り口が浅く無く、それこそ
鍛えられた兵士じゃなきゃあり得ない
傷の付け方だったのだ。つまり……

「……帝都の連中か…！」

その言葉を口にした途端、自分の心の中に
ドス黒い何かが渦巻くのを感じた。

「……待っててね皆。」

スクッ

「必ず敵は取るから……！」

最後にもう一度皆の墓を一瞥して、
敵を取るという強い信念を宿して、
帝都に足を運んだのだった……

自分のポケットに突如として現れた
ドス黒いガイアメモリに気づかずに……

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ……

主人公って絶対イケメンか美少年だよね

その後、俺は色々な村を経由しながら、
帝都に向かって行った。ついでにその
村での問題も解決していった。
ある時は…
「最近雨が降らないから作物が育たな
くて…あまり食事は提供出来ないんです
けど……」
「それなら……」
《Ｗｅａｔｈｅｒ！》
ゴロゴロ……ザーーーッ!!
オオオッ…アメダーーー！
コレデサクモツモソダチマスネ！
「あ…ありがとう御座います…！」

またある時は…

「あぁ…ワシの家が……」
「どうしました？」
「オォ旅のお方…実は先日族に襲われ
ましてな…ご覧の有様ですわ…」
「そうでしたか…ですが安心して
くださいませ……」
「え……？」
《Ｔｏｏｌ！》
「何故って……」トンカントンカン…
ジャーーーン！（立派なお屋敷）
「ー（。Д。）ポカーン
「私が来たのだからッ！」
（平和の象徴ポーズ）

……
…とまぁこんなカンジで帝都を目指した訳ですよ。え？途中から調子乗ってただろって？そんなわけ無いじゃないか。ホントよ？ボクウソツカナイ。
さて、そんなくだらないことを考えている内に……
「や…やっと着いた…！」
ようやく帝都にたどり着いたのだった。特に何かあるわけでもなく入国した俺は、周りを探索してみることにした。
「しっかし…やっぱり沈んでいる人が多いな…」
この国では現在、腐敗した政治、殺人や強盗、国に不利益な者たちへの無差別な処刑によって、腐りまくっていた。まぁこの辺のことはアニメのお陰で知ってはいたんだけど…やっぱり直に見るとなんかクるものがあるなぁ……
「で……彼処にいるのが…」
そして、こんな国にした現況が、あの宮殿にいる皇帝…いや、正確にはその皇帝を裏で操っている大臣こそが諸悪の根源なのだが……
「まぁどうせ主人公ってのタツミだっけ？その子が何とかしてくれるでしょう。俺には関係ないっと」
そう。この男、自分の利益になること、正しくは、自分の平穏な日常の為だけに行動することをポリシーにした男だったのだ。ただ、平穏を害しない場合は普通に

人助けなどはするのだが…
「ん?あの子って…」
ココガテイトカー!
「……オイオイマジかよ…」
そう。今回の主人公はタツミではなく、
この男なのだ!(メタスギィ!)
そうは問屋が降ろさない。
「すみませーん!兵舎ってどの辺にある
か知ってますか?」
「あーっと…俺も今日初めて来たから
詳しいことはよくしらねぇんだよ。」
「そうか…」ションボリ…
「うっ……まぁ一緒に探してやるよ。そう
すれば早く見つかるかも知れないし」
「あ、ありがとな!俺の名前はタツミって
言うんだ!帝都で有名になる男だぜ!」
「そうか、俺は園崎創憶だ。そうだな…
《ソウ》って呼んでくれ」
「おう!じゃあ早速探しに行くか!ソウ!」
「あ、おい!速いってタツミ!」
……
あの後、無事に兵舎を見つけられたが、
入隊希望をしに中に入って行ったタツミ
が、一分もしない内に追い出された。話を
聞いてみると、隊長辺りカラスタートさせ
てくれと頼んだら追い出されたらしい。
それはお前が悪い。
「さて、これからどうする?タツミ」
「う~ん…どうしよっかなぁ…」
「何も考えてなかったんかい!」
そうやって俺らが道ばたで立ち往生してい

ると……
「お困りのようだなぁ少年！お姉さんが力を貸してやろうか！」
そこには、ボンキュッボンな女性がいた。
……こらタツミさん？鼻の下伸ばすんじゃありません。俺もしそうになったけど！
「少年はさー、帝都にロマンを求めてやって来たクチだろ？私手っ取り早く志願できる方法を知ってるんだけど…どうする？」
「まじ!?」
「あー俺はパス」
「え？」
だって俺は志願したくて帝都に来たんじゃないもん。それにこのまま話しが進んでいけば、面倒なことになりそうだし。
「それに俺はこれから行きたい所があるんでね。すまんがタツミ、これからは別行動だ」
「そ…そうか、そうだよな。ソウは俺と違って志願するために来たんじゃ無いんだよな…」シュン…
「っ…・あーすまんがそこのお姉さん？少し時間を貰えますか？」
「え？あぁ別にいいけど…」
「どうも、おいタツミ。ちょっとこい」
「何だよソウ？」
……
「どうしたんだよ？こんな路地裏に…」
「お前に渡したい物があるんだよ」スッ・・
「なんだそれ？」
ソウが懐から出したものは、黄緑色の棒状

の物体で何かの文字が刻まれていた。
「これはな…《ガイアメモリ》だ」
「ガイア…メモリ……？」
「そう。これは、どんな怪我や病気でも、効果続く限りなら治療できる道具屋だ。使い方は……」スパッ
「ッ!?何してるんだソウ!?」
「まぁ見てなって」カチッ
《ｍｅｄｉｃａｌ！》
ズッ…シュウウウウウ……
「!?」
ソウがいきなり自分の指をナイフで切ったかと思えばさっきのガイアメモリ？とかいうやつで直しちまった。こんなものがあるなんて……
「とまぁこんなカンジだ。わかったか？」
「あ…あぁ…」
「という訳でこれを…そうだな、三本ぐらいやるよ」
「え、いいのか？」
「まぁこの帝都で初めての知り合った『友達』だからな。これからまた別々になる訳だし、これ位はさせてくれ」
「友達…そうだな。ありがたく頂くよ！」
「おう。さて、そろそろ戻らないと、あの姉さんが可哀想だ」
「あ、あぁ。そうだったな！」
すっかり忘れてただろタツミさんや。
……
「いやーすまんねお姉さんや。すっかり話し込んじゃって」

「いいって。それより少年。さっきの話、どうするんだい？」
「ああ！ぜひぜひ教えてくれ!!」
「じゃあ俺はこの辺で。またなタツミ！」
「おう！またなソウ!!」
そうして俺はタツミと別れ、再び周りの探索もとい観光を続けるのだった。

（あの青年、只ならぬ気配を感じた…一応頭の隅に入れておくかな……）

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ……

面倒ごとには関わりたくない人生だった

あの後、俺はタツミと別れ、再び帝都を探索もとい観光に勤しんでいた。そこらにいる人たちの顔は沈んでいるものの、それなりには栄えているようで、料理屋らしき
ものも沢山あった。
その近くに衣服店があったので入ってみることにした。
「すみませーん」
「ようこそ。どのような物をお探しですかな？」
カウンターの奥から出てきたのは、優しげなおじいちゃんだった。見たところかなりの間この店を営んでいそうだった。
「そうだな・・・あのローブと・そうだな、無地の仮面って置いてあるのか？」
「はい、一応仮面の方はまだ装飾していないものがありますが・・・宜しいのですか？」
「あぁ。それで大丈夫だ」
これから先絶対に何かしらのトラブルに巻き込まれる
だろうからね。せめて顔が割れないようにしなくちゃね。
そのためのフード。あとそのための仮面？

「ありがとうございましたー」
さって欲しい物は買ったし、ある程度は観ｋゲフンゲフン
探索も出来たことだし、ぶっちゃけもうすることないんだよなぁ・・・・
「そうだ！せっかく帝都にいるんだ。なにか美味しいもん食べなきゃ損っもんだ！」
よっしゃ！そうと決まれば、早速店にＧＯだ！まっていろ
美味しい美味しいご飯達～！今行くからね～～！

そして夜・・・・・
「あ〃～食った食った・・・・」

あれから今までずっと食ってたお陰で、お腹がもうパンパンだよ。だってご飯が美味しかったんだもん、仕方ないよね！（自業自得）
「さて、そろそろ暗くなってきたことだし、今日は宿かなんかに泊まりますかね。」ガサゴソ
サイフ〈スッカラカーン
「・・・・・・・・・・・・・・」
あ〃あ〃あ〃あ〃あ〃あやっちまったあああああああああ!!!
ついつい食べ過ぎたせいでもう宿代残ってねえええ!!
まぁ寝る事に関しては、また野宿すれば良いだけの話なんだけど・・・布団・・・フカフカ・・
「まぁウダウダ言っててもしょうがねぇか。それに今回限りって訳じゃないしね。」
それじゃまた野宿しますかね。流石に路上で寝るのは抵抗あるから、あそこの森の中にでもしようかな。あん中だったら誰にも迷惑かけないでしょ。

「よし！準備も出来たことだし、早速お休みなさＺＺＺ・・」
そう、この男、度重なる悪環境での就寝により、どんな所でもスグに寝てしまう事ができるのだ！
しかし、ただ一つだけ克服できないものがあった。
それは・・・・・・・・・・・・
「ＺＺＺ・・・ＺＺＺ・・・」
カキン・・ガキン・・
「ＺＺ・・Ｚ・・」
ダァン！・・ダァン！・・
「・・・・・・・・」イライラ・・
ギャリッ！・・ドゴッ！・・
ブチッ
「じゃかましいんじゃあああ〃あ〃あ〃あ〃!!!!!」

騒音である。

あ～もうキレたわ。こちとらただえさえフカフカのベットで寝れなかったからイライラしてんのにさぁ・今何時だと思ってんの？これは粛正ですわ間違いない

（完全なる八つ当たり）

「こっちの方からか……」ガサガサ・・

一体どんなクソ野郎が騒いでやがんだ？余程の事じゃ

俺は認めねぇ・・・・・ぞ・・・・

「でもこの娘は斬るつもりなんだろ!?」

「うん」　「うん!!?」

「・・・・・・・・・・・・・」

タツミイイイイイイイイ!!!??

やべぇよヤベぇよなんかとんでもない場面に遭遇しちゃったよ！そういえばここって、アニメタツミがアカメとかいう女の子と戦う所じゃん！そりゃあんな音なるわな！なんか明らかに砲弾の音も混じってたし!!

「ふっ・・・くっ・・・・・・！」ガキン！・・ギャリッ！

まぁでも、確かこの後タツミが無いから安心して見れるは。これがもし原作知識無しだったら飛び出してたんだろうけど、いやぁ知識って偉大やな!!

「そんじゃ、俺は戻るかな。余り長居して面倒ごとに巻き込まれたらヤダしね」

そう言って、元の場所に戻ろうとした時・・・・

コンナ楽しそうな事見逃すなんて、できまセンネェ・・

「!?……なんだ…これ…?」
いきなり頭の中で声がしたかと思うと、不意に意識が朦朧としだし、直ぐに倒れてしまった。
薄れゆく意識の中で、最後に聞こえたのは……
《Ｃｈａｏｓ!》（混沌）

見たことも無い、とても禍々しい音だった

「くっ……クソっ…!」
今俺は、泊めてもらうことになったアリスさん達の屋敷に突然現れた【ナイトレイド】と言う殺し屋集団の襲撃
に対応している。今は目の前にいるヤバい刀を持った女の子と戦っている。けど、とても強く油断したらやられ
そうだ…!!
ドゴッ!
「ヤベッ!」グラッ
「……これでトドメ…!」
突然の回し蹴りでよろけた隙に、相手は俺の胸に刀を
突き立てようとしていた。あぁ…これはもう無理だな…
すまねぇ…イエヤス…サヨ…先に逝ってるぜ…
そう思って俺は目を閉じ、諦めていたが……

ガキィィィィン!!
その刀が俺に刺さることはなく、代わりに俺の目の前には変わった格好をした人が大きな鎌で刀を防いでいた
「!?」シュンッ…
相手も流石に予想外だったのか、突然現れた人物を警戒するかのように距離を取った
「ン～ツレナイネェ…コッチはこんなに友好的に接しているってのに

サァ・・・・」
「・・・・・・・・・お前、何者だ？」
「おっとコレハコレハ、自己紹介がまだでした・・・・」

「ワタクシの名前は【カオス・ドーパント】！是非とも今後ワタクシのことは《カオス》とお呼び下さい？」

ガキイィイン！！

「！！？」
「殺し屋集団のお嬢さん？」
エヒャ！！！！！！
一瞬の内に相手の懐に入って一撃を食らわせた人物は、世にも狂喜じみた笑い声を上げげた。その姿はまさしく、【カオス】（混沌）の名に恥じない姿だった・・・・
「サァサァ、楽しみマショ？この素晴らしいゲームを！」

To be continue・・・・

戦闘シーンを書くほど難しいものは無い

ドウしました??ドウしました??モット遊びましょ??遊びましょ??」
「くっ・・・・・！」
突然現れたこの謎の人物は、その大きな鎌を巧みに扱いながら私に攻撃を仕掛けてくる。しかも相手は苦戦している様子は微塵も無い。長年殺し屋家業をしてきたが、こんなにも底が知れない相手ははじめてだ。
「・・・お前は標的では無い」
「イヤーそうは言いますデスがね？アナタ様は後ろのこの方を殺そうとシマしたよネェ？このお方を守ってクレとワタクシの『ゴシュジン』のお願いデスからねぇ？」
「・・・・・・なら葬る」
悪人と断定出来ない以上、出来る限り殺しはしたく無いのだが、間接的にも
この『館』を護衛する者との関係者であるこの者を無視することは出来ない。
それを抜きにしても、この強さは危険すぎる。
「エヒャヒャ!!やれるモノならやってみルのですよ!!」

タツミSIDE
「・・・・・・・・・・スゲェ」
タツミは突然現れた人物の戦闘に目を奪われていた。あんなに自分が敵わなかった相手に一切の引け目を取らずに戦っているその姿に
「ってかボーっとしてる場合じゃねぇ！俺は俺のやるべき事をしなくちゃ！」
自分を喝を入れて守るべきアリアさんに駆け寄っていく
「大丈夫ですかアリアさん!!」
「え・・・えぇ・・」

くっそ！あの人があの強ぇ女の子と戦ってくれているおかげでアリアさんに
被害は無いけどもう一人のあの甲冑男こっちに来たら太刀打ち出来ねぇぞ!?
でも・・・・・・・
「みす知らずの人が助けてくれたんだ！ここでやらなきゃ男じゃねぇ!!」
勇気付けられたタツミの目には、メラメラと闘志の光が燃え上がっていた

ソーオクＳＩＤＥ
やぁ、おはよう御座います。皆のアイドルソーオクちゃんだよっ☆
・・・やめよう、言ってて気持ち悪いわこれ
さて今俺は真っ暗な空間に一人突っ立ているのです。いや、突っ立っているって言うよりもなんか、視点だけが浮いてるってカンジ。手も無ければ足もない。とりあえずフラフラと移動（？）してるんだけども・・・・・・
おっ！あそこの方なんかチカチカしてね？ヤッホイやっと外に出れそうだ。
まぁ体が無いっていう方を先に何とかしたほうがいいんだろうけどそんな現実は取り敢えずしまっちゃおうね～
さって近づいて見た感じなんかの映像み・・・た・・・

「ソラソラソラ!!どうしまシタ？ドウシたのデス？マダマダ続くよドコまでモオオオオオオオ!!!」ガイン！
「ぐっ！・・・・・・・くっ・・・！」ガキン！

イイィイイィィイヤアァァァアアァアアァァァァ!???!?!?